

段丘に農を営む：北原文化の魅力

長野県立歴史館 町田勝則氏

1. 高森町北原遺跡の魅力

今日は弥生時代について、特に地元の遺跡である北原遺跡を中心に、話をさせていただきたいと思います。

芦部館長さんのお話にありましたように、北原遺跡というのは長野県内でも屈指と言いますか、全国的にも非常に有名な遺跡になります。地元でそこまで知られているか、どうか。遺跡の重要性についてどこまで理解されているか分かりません。少なくとも今日、私の話の中に出てくる磨いた鍬(やじり)、磨製石鍬(ませいせきぞく)と言いますが、これは非常に古い段階から学会で紹介されておりまして、「信州の北原遺跡には磨製石鍬がたくさん出る」ということが全国的に知られていました。磨製石鍬は弥生時代になって登場する大陸系の磨製石器の一つです。その鍬が高森町でたくさん出る。

今日、お米づくりの話をするわけですが、ご承知のようにお米づくりは縄文時代の後、大体、今から3000年ぐらい前に朝鮮半島もしくは中国大陸から九州に渡ってきたと言われていています。3000年ぐらい前のことです。

長野県で、食料としてのお米の情報だけではなくて、今、(画面の)絵にあるように田んぼを作ってお米を収穫するなど、稲作の技術がしっかりと定着するのは、古くても2500年ぐらい前になります。九州に稲作伝わって500年ぐらいの開きがあるということになります。だいぶ時間がたってからのことになります。この絵はお米の収穫をしているようすです。これは小学校の副読本とか資料集に載っている図を借用させていただきましたが、一つの図の中に、いろいろな時期、四季が入っています。日本には春夏秋冬があります。田んぼをつくる段階が春先で、稲の成長を促す夏、収穫する秋、そして冬という流れで四季が入っています。田んぼで稲を収穫するようすが、絵の真ん中にあります。現在でも稲作(水稲栽培)にとって欠かせないのが田んぼです。

実は、伊那谷では弥生時代の田んぼの跡が発見されていません。確実に弥生時代と言える田んぼの跡が出ていない。上伊那になりますけれども箕輪という町があります。そこに箕輪遺跡という弥生時代の集落跡があり、そこでは田んぼの跡が発見されています。けれども、それより南については、遺跡から田んぼの跡が発見されていないんです。ですから、伊那谷の田んぼづくり、伊那谷の稲作とは、どのようなものであったのかを考えた時に、考古学的には田んぼがないものですから、稲をどれだけ作ったかとか、どれぐらい食べていたのか、ということが説明できないんです。人によっては、米づくりをしていないとする方もいらっしゃいますし、いや、米は天竜川に近い所で作っていたのだから、洪水で田んぼの跡は流されて見つからないんだと、いろいろな意見が聞かれます。いずれにしても稲作の時代に入ったことは間違いないので、多かれ少なかれ、米は作っていたらと思うられます。米の作り方を始め、作った場所など、考古学的に十分な追究が必要です。

先ほどご紹介がありました、私は実のところ長野県の出身ではないので、信州の北であろうが南で

あろうがあまり執着がないので、いろいろなことが言えるんです。長野県は非常に南北に長いので、北と南で文化が大きく違っていています。弥生時代においても、大きく違うどころか、私は石器が専門ですけども、まったく南北で違っていています。それを同じ稲作文化として、ひとつの弥生時代像にまとめ上げていくところに、信州の魅力があると私は思います。これが私の出身の群馬県だと、群馬県は地域を大まかに東と西に分けますが、同じ関東平野の中にあるので、東西ではあまり地域的な違いというものはありません。遺跡でも同じことです。ところが長野県は北と南ではまったく違う。弥生時代は特にその違いが著しいので、北原遺跡を題材に、その話を今日、ちょっとしてみたいと思っています。私は長野県へ来て30年位になりますので、その中で感じたことを話させていただこうかと思っています。

1) 稲作の型

最初に少し話しますが、この絵の中では、稲の苗束を投げて、これから田植えをしようという姿が見られます。ただし稲作と一口に言いますが、いろんな稲作のかたち、やり方があります。東アジアの中では大体四つ位に分けて考えられています。日本の場合は、今はどうなっているかと言うと、一回、苗代を作って稲を育ててから、それを田んぼに持って行って、一本一本植えていく方法ですね。移植型稲作と呼ばれる農法です。そうした農法に比べて、粃をばら撒くというのがあります。田んぼに粃をばら蒔いて、発芽した所をそのまま田んぼにしてしまう、散播型稲作という方法です。つまり、稲作には、いろんな農業の形がありますが、日本の弥生時代がどういう農法だったかということは、はっきりとは分かっていません。ただし稲株の跡が時々、遺跡から発見されるので、それを見る限り、ばら撒いたのではなくてある程度、移植をしていた可能性があると考えられています。あまり定かではないですが。

いろいろな農法の中にも、水を田んぼに引き入れて稲を育てる水稲ばかりではなく、陸稲と呼ばれる栽培法もあります。水の少ないところで稲を発芽させて育てる。たまたま私は自分の家が農家なので、苗床に播く粃を畑に蒔いておいたら、水稲よりずっと大きくなって、結構な背丈に伸びたんです。捻熟度は調べてみませんでした。だから日本の今のお米は、遺伝子上、畑でも育てられるように出来ているんですかね、ちょっと分かりませんが、いずれにしても、水の少ないところでも稲を育てるというやり方もちゃんとあります。

2)-1 高森町の北原遺跡

皆さんの資料の一番後ろのページに、歴史年表と言うか、北原遺跡の文化期の位置が書いてあります。弥生時代の中頃とだけ思っているとよいです。弥生時代も非常に時間幅があり、古い方から前期、そして中期、後期と三つ位に大きく分けて考えられています。前期の前に早期という古い段階を設ける考えもありますが、前期、中期、後期と三つ位に分けた時の、真ん中辺が北原遺跡の時期だと思っています。分かりますのは、今から丁度2000年ぐらい前、弥生時代の中頃だとみればよいかと思っています。

北原遺跡は、この高森町からお借りした写真の、ここですね。153号線の上のこの段丘上ですね。ここが北原遺跡です。正確には分からないのですが、これが中学ですか（声：これが中学でこれが役場です）。このあたりが、今いるところ、積善会館ですね、丁度、この辺が調査地になりますか。

おそらく、この一帯には非常に大きな弥生時代中頃の村が作られていた、かなりの大集落があったと思います。口惜しいのは、信州でも北の千曲川流域だと遺跡がたくさん発掘されていて、弥生時代中頃の大集落がたくさんあります。弥生の大集落は北にあって南にはあまりない。何となくそのように思わ

れがちなんです、北原遺跡は、おそらく100年200年、いやもっとですかね。300年ぐらい続く大集落だったと思います。これから少しずつ調査が進んで内容が分かってくると、そのことがはっきりとしてくると思います。

本日は一つ目のポイントになります。田んぼをつくって稲作をする、共同作業が進んで集落が広がる、そうすると基本的には大きな人口を抱えるということになってきます。稲作をたくさんやる＝人口が高まる、人口密度が高くなるというふうに、短絡的に思いがちですが、田んぼが発見されていない伊那谷にも、北原遺跡のように、ものすごい集落が存在する。決して信州の北にある、千曲川流域にあるような大規模集落というものに引けを取らないぐらいの大きな集落がここにあります。大きな集落があるということは、それなりの人口を維持出来たわけですから、当然その人口を維持するための農業というものは、かなり発達した段階にあった。そこがポイントだと思います。田んぼが発見されていないだけに、その農業が何かということが問題になるわけです。田んぼがなくとも大きな人口を維持できる生業形態は何か、段丘に営まれた生業は何か、それが今後の課題になってくると思います。その課題を説明していけるのが、この北原という遺跡です。伊那谷の弥生文化を考えるうえで、とても楽しみな遺跡です。北原遺跡のあるこの場所は、考古学研究上、本当に大事にしたいところなんです。

大阪府に弥生文化博物館という、弥生文化に特化した博物館があります。大阪府立の博物館です。たまたま今、《弥生農耕－田んぼとはたけ－》という特別展をやっていて、長野県の石器も展示してあると図録に書いてありました。どこの石器かと言うと、飯田市の恒川(ごんが)遺跡群の石器が展示してあると紹介されていました。実は飯田の恒川遺跡群の石器は、弥生時代の中頃から始まって終わり頃までずっと続いてくる石器群です。私に言わせると、今日、紹介しますけれども、飯田の恒川遺跡群の石器よりも北原遺跡の石器の方が、格段に研究的価値が高い。むしろ飯田の石器は、ここの石器群を母体に作られていると言ってもよいくらい、ここが一番の発端です。そういうものだと思います。とても素晴らしい。だから飯田の恒川遺跡群を借りないで、ここを借りればよいと思うのです、大阪府も。北原遺跡の石器群の内容をよく知らないんですね、残念ながら。県内の研究者でも、ここの遺跡の内容をよくは知らない。磨製石鏃が過去に知られていたにも関わらずです。伊那谷の石器を借りるとなると、すぐ飯田市というふうになる。私は、伊那谷を象徴する、伊那谷の弥生文化を象徴する石器を展示するのであれば、北原を借りた方がよいと思います。それだけ素晴らしいんですね。

2)-2 北原式の土器

この写真は北原遺跡の土器です。今回、県立歴史館の秋季企画展で借りている土器です。壺と甕になります。次に北原式土器を図で見えます。

北原式を古い方と新しい方と分けると、こちらが古い壺で、新しいのはこのような土器だと思われま。何が違うかと言うと、壺の胴部上半分のところに三角形みたいな山形の模様がありますけれど、山形の模様のつけ方が違う。古い方は竹ベラみたいな、ヘラみたいな道具で刻んで、このように線を入れたと言われています。新しい方になると、竹ベラのようなものではなくて、細い棒を紐で編んだような櫛状(くしじょう)の道具で描く。櫛描きと呼ぶのですが、櫛状の歯で描く模様に替わってくる。そうした傾向がありますということですね。それで古いものと新しいものを区別している。

たまたま、この図は飯田の遺跡を取り上げていますが、北原遺跡の出土資料が整理されてくると、この辺が古いものから新しいものへと、しっかりと土器の流れが分かってくる。北原式と呼びますように、

北原式という名前がついているくらいですから、土器の変遷図においても、何も飯田の遺跡を使わなくても、本家本元、地元の土器を使って順番を決めればよいということになりますね。

2)-3 南の北原式と北の栗林式

この地図は長野県です。北原遺跡はここですね。北の方にどのような土器があるかということ、栗林式土器があります。栗林というのは、中野市の栗林遺跡から発見された土器を、栗林式土器と呼んでいます。高森町の北原遺跡から発見されたものを北原式と呼ぶように。簡単に言うと長野県の南北で、弥生時代の中頃に、二つの大きな土器の違いがあるということです。

それで、この地図には北の方に大きな円が描いてあります。大体、長野、佐久、松本、諏訪湖周辺まで、栗林式土器を使った大きな文化圏がありました。円が大きく描いてあります。南の方は高森と飯田を中心に小さな円になっていますけれども、これがどこまで広がるかというのは、今のところ未知でよく分かりません。少なくともここ辺りに拠点があったことは間違いないと思います。北の栗林、南の北原、信州の弥生文化を考える上でこの二つがとても重要です。北の方ばかり遺跡の発掘が進み、非常に多くの遺跡を掘ってしまったので、北の方ばかりが明確化した。南の方はこれからですね。ここね、赤い線が地図上にある。(お手元の資料は)白黒でごめんなさいね。赤い線がこのように引いてある。赤い線は何かというと、栗林式土器が千曲川流域からから諏訪湖の方へ入って来て、さらに諏訪から上伊那に入って、南信まで土器は動いていますよという矢印です。

ここで覚えておいていただきたい二つ目のポイントは、北と南を比較する時に、北の文化的要素が南に入って来る時は、おそらくこの諏訪湖を通して来ます。諏訪を通して南へ下りてきます。松本ではありませんよ。そこが重要なところですから覚えておいてください。

今日、会場にいらっしゃるみなさん方が中心となって北原遺跡の重要性をより広めて、地元を盛り上げていただけたらと思つています。北原の文化を考える時に重要なことは、北原遺跡の中に栗林式土器がいくつも入って来ていること。あるいは栗林式の影響を受けた土器が現われてくる。重要な点は、北との影響関係が確実にあり、それが松本を経由して来ているのではないということ、おそらく諏訪を経由して来ているということです。このことは学界の通説ではありませんよ。単に私ができるように思っているということです。諏訪を経由して北の文化的要素が入って来る。逆もまた真で、逆のこともまたあります。伊那谷の北原文化が北に影響を及ぼす時は、このルートを逆に遡ればよい。諏訪を経由して北へ行きます。佐久地域へ行き、あるいは上田盆地の方に入っていく。松本・塩尻はちょっと違う。

2)-4 北原式の石器

これは北原式の石器ですね。今回、県立歴史館でお借りしているので、資料館(「時の駅」のこと)には展示はされていません。先ほど展示を見させていただきましたが、今日から《弥生文化展》が始まりました。みなさんも、ぜひ見ていただければと思います。こうした石器がたくさん並んでいます。

伊那谷に発達した収穫用の石器

このスライドの石器で何が凄いかというと、たとえば7番、8番というのは横刃形石庖丁(よこばがたいしぼうちょう)という名前がついています。横に長い石庖丁というのはどういうものかということ、後で出てきますけれど、稲の穂を摘む道具のことですね。穂を摘むものを石庖丁と呼びます。こちらは石の鎌のようなもので、石鎌(いしがま)というものです。また、こういう抉りの入った有肩扇状石器(ゆうけ

んせんじょうせつき)という、切った対象物は分からないのですが、植物栽培に関わるとみられる石器があります。天竜川に落ちている硬い砂岩という石を打ち割って、破片のところに両方から挟り込み、切り込みを入れて、何らかの刃物にして使ったものです。こちらの石器は非常に簡単な、庖丁みたいな恰好をしていますね。まさに庖丁形と呼ぶのにふさわしい形ですね、昔、靴形とか呼んだりして、名前がいくつもついた石器です。こんな立派な包丁形の石器は初めて見ました、素晴らしいですね。このように庖丁形をした石器は、簡単に言っちゃうと日本に一つしかない、中部山岳地域にしか分布しない、そういうものです。まだ正式に名前がつけられていないので、これからつけてみる。下が刃で、背中の方は切れないように刃潰ししてある。こつこつと叩いて加工してあります。

このように北原式とか、栗林式もそうですけれども、植物質の食料を収穫したり、切ったりする道具というのは、いろいろな形のものがあります。一つの限定した形ではありません。いろんな形のものがあります。ただし北の形と南の形は多少、違っています。特に今、お見せしているこれらの石器は、伊那谷を中心に見られるものになります。たとえば11番の有肩扇状なんていうのは、北にはない石器ですね。南の伊那谷にしかありません。今回、歴史館で展示している南の出土品には、たくさん出てくる石器です。

こちらは最初に見た絵ですけれども、お米づくと共に渡来した大陸系の磨製石器と呼ばれる石器があります。縄文時代から継承された石器ではなくて、大陸から新たに伝わった石器です。どういう石器かというと、表面を磨いた石器、つまり磨製石器です。主なものは石の斧ですね。木を切り倒す伐採斧(ばっさいふ)とか、木を加工する手斧(ちょうな)のようなもの。それらがやって来る。それに磨製石庖丁がやってきます。もう一つやって来るのが磨製石鏃と呼ばれる、磨いた鏃(やじり)です。これら三つが主な大陸系磨製石器になります。冒頭にお話した北原遺跡を代表する磨製石鏃というのは、その意味で大陸からやって来た、新しく米づくりと共にやって来た鏃ということになります。つまり磨製石鏃が多いということは、大陸文化との何らかの影響関係が認められる場所ということになります。果たして高森町北原遺跡がそうであったのか関心を引くところです。同様に磨製石庖丁の多いところは、大陸からの影響が非常に強い。磨製石庖丁と共に地元で発達するのは、磨製ではない、石を打ち欠いただけの刃物です。それは北も南も発達してきます。残念ながら、石を打ち欠いただけの刃物と言うのは、なかなか学会で取り上げられていません。北も南も信州にはたくさん種類、刃物に8種類も9種類もある。弥生時代の刃物で、たくさん種類を持っているというのがはっきりしているのは、日本全国でもここだけです。その意味でも、みなさん、ぜひ「時の駅」資料館に行ってください、石器がたくさん並んでいますけれども、似たようなものがたくさん並んでいるな、ではなくて、いろんな形の種類が豊富にあって、それが長野県の特徴だ、特に伊那谷はこうした刃物が発達していたと考えてみてください。

仮に石の刃物で植物を切ったとすれば、稲を摘んだとすれば、ひとつの形でよい。何もいろいろな形を作る必要はないですね。一つの形のもので稲刈りをすればよい。現在、我々が稲刈りをすると、稲刈り鎌をまず買います。稲刈り鎌が10種類も必要だなんて聞いたこともない。普通、稲刈り鎌というのは、鋸歯状の刃がついた一つの形のもので、大陸には青銅製の鎌がありますが、ほぼ一種類です。石器にこれだけの種類があるということは、使い方もしくは切る対象が違うということにもなります。そう考えられる。現在だと魚屋さんの庖丁なんて何種類もありますよね。魚を捌くのいろいろな種類の庖丁を使っている。同じように弥生時代の刃物が収穫具であるとすれば、収穫する植物の種類がたくさんあり、収穫の仕方の違いにより刃物の種類がたくさん用意された、豊富な石器があると考えられるわ

けです。ただし何を切ったかはよく分からないので、それはこれからの課題ですが、少なくとも、植物質食料獲得のための道具が豊富にあることから、食料生産はかなり発達していたと考えてよいでしょう。

7番と8番は刃が長い横刃形石庖丁で、何を切ったかは分かりません。ある研究では稲穂を切ったとされていますが、すべてのものが稲穂を切ったかどうかはまだ分かりません。今回、歴史館で借りているので「時の駅」で資料を見ることはできませんが、歴史館に来ていただければ見られます。企画展が終了すれば里帰りしますので、里帰りした時に、折角ですから長野県と高森町の友好展示ではないですけれど、「時の駅」に北信地域の栗林式も展示してあるように、北信地域の石の道具を展示させていただくと、比較できて分かりやすいのではないかと思います。7番、8番はですね、北信にはこんなに長い刃を持つ横刃形石庖丁は1本もありません。私は石器屋(石器研究者の意味)だから言うわけではないですが、これは本当に素晴らしいです。北信の刃物(刃器)と比べてみるとよく分かりますけれども、とても素晴らしい石器です。

北信の刃器と南信にある刃器はちょっと違う、そうした図です。図中、ここに境界線がある。今日の課題の中で、三つ目に覚えていただきたいポイントがあります。これからいくつか石器が出てきます。最初に栗林式土器の分布と北原式土器の分布の図が、何コマか前に出てきたと思います。その図では千曲川流域と松本平、諏訪は、同じ栗林式土器の文化圏に入っていました。同じ土器を使っていた。南信のこの辺に北原式の文化圏の中心があるという話も、さっき出てきました。栗林式というのは大体、長野県の半分ぐらいまでに影響を及ぼしている土器です、北原式というのは飯田・下伊那のこの辺に広がる土器という図が出てきました。

こちらの図を見てください。何を伝えたいかと言うと、縄文文化と弥生文化では大きな違いがいくつか指摘されていますが、文化の捉え方の端っこに見逃しがちな違いがある。何があるかと言うと、これは実は大事なことです。栗林式土器を使っている文化だとすると、同じ土器を使っていれば同じ道具を使っていると、普通に思うわけですね。同じ文化なのだから。栗林式土器を使っているのだから、当然、同じ道具を使うだろうと。同じ磨製の石庖丁を使ったり、磨製の斧を使ったりするだろうと思われませんが、これを見てください。例えばこの刃器は、松本や諏訪というのは北の地域とは同じものを持っていません。どこと同じかと言うと、北原遺跡と同じものを持っている。ここ高森と同じものを松本や諏訪は持っているのです。ところが土器は北原式の土器ではない、北信地域に分布する栗林式土器を使っている。通常、同じ土器を使っている地域の人はおそらく同じ形の石器を使うと思うわけです。けれども、弥生文化では同じ土器を使っているでも、それこそ松本と長野では全然、違う石器を使っています。

これは考古学ではとても重要なことです。あまり注意されていない。土器が同じなら同じ文化だ、栗林文化だというふうに、一言で語ったりするわけですね。実際、収穫を行い、自分たちの食料を採集する道具の形が違って本当に文化が一緒ですかということです。道具の形が違っているのに同じ文化の人ですかという話になっちゃうわけですね。だから松本・諏訪はどっちかということです。松本・諏訪の人たちは北原文化の人ですが、それとも栗林文化の人ですかという時に、土器でいったら栗林式ですね。石器でいったら北原式になっちゃう。そういう話はいくつかあります。

石庖丁も出てきます。ピンク色のこれが実は二つ穴の石庖丁です。青い北原遺跡を中心に分布するこちらは何かと言うと、一つ穴の石庖丁です。この図を見ていただきたいのですが、大陸から米づくりと一緒に渡ったという石庖丁には2種類があるんですね。通常は二つ穴の磨製石庖丁を渡来したものだと言うふうに考えます。二つ穴の、つまり栗林文化の持っているあのピンク色の範囲のところに分布してい

るものですね。それが磨製石庖丁と普通は言われます。なぜ普通に言われるかというのは、これもいけないところなのですが、子どもたちが6年生になって習う教科書に出てくる石庖丁は二つ穴のものだからです。二つ穴なので、教科書に載っている磨製石庖丁、それを磨製石庖丁と認識するわけですね。でも実際は一つ穴のものも出てくる。写真がないと分かりづらいので、あとでお見せします。二つ穴と一つ穴の石庖丁があって、北の方は二つ穴の石庖丁、南の方が一つ穴の石庖丁ですね。同じ石庖丁でもなぜ違いがあるかということが重要になります。なんで二つ穴と一つ穴があるのか。長野県の南にはほぼ例外なく二つ穴はありません。一方、北の方にはやはり一つ穴はなくて二つ穴があります。そうした違いがあるとすると松本・諏訪はどうかというと、松本・諏訪は北原文化と同じで一つ穴の石庖丁を持っています。栗林文化の持つ二つ穴ではありません。したがって磨製石庖丁も先ほどの石の刃物と同じように、どちらかというとな北原式と同じものを持っています。土器は栗林でも、石庖丁は北原と同じものを持っている。

各駅停車しない文物

これは鍬ですね。石の鍬。畑(はたけ)を耕すのに石の鍬を使用したとすると、北信地域には石の鍬というのはほとんどありません。出てこない。南信地域にはたくさんの石の鍬があります。北信地域には畑はないのかという話になっちゃいますけれども、柔らかい土地だったので、じめじめした土地を掘るのには石でなくて木でもいいのではないかと。そういう話もあったわけでございますけれども、どうしてだか分かりません。北の方にはなくて、南の方にたくさんある。

砥石と磨石、この写真はすべて北原遺跡の出土品です。

今回、お借りしましたが、赤い勾玉もあります。これ1個だけ、穴が開いていますね。一つは開けかけています。勾玉というとみなさん、丸っこい、きれいな勾玉を思い浮かべる、頭が丸くてひょいっと反ったようなこういう勾玉を思い出します。これは英語の D の字をひっくり返したような形をしているのでD字形勾玉(半月形勾玉)とって、元々のルーツは朝鮮半島にあるとされています。朝鮮半島からやってきた勾玉ですね。弥生文化と共に登場して来ます。こういう形が出てきたら、これは朝鮮系のものであるし、弥生時代のものと考えて差支えないでしょう。実は北原文化の一つの特徴として、装身具があまり発見されていないですね。首飾りだとか腕輪だとかが発見されない。どうしてそうなのか分かりませんが、いずれにしても装身具はないのです。農業の道具はたくさんあるけれども、耳飾りとか飾るものはない。ただその中で、北原遺跡には赤玉という、普通、赤玉は佐渡産ですけれど、それで作った勾玉が1個だけあるわけですね。あまりいい加減なことは言えませんが、おそらく私の頭の中に残っている範囲では県内に赤い勾玉はほかに一つもないです。ここだけです。北原遺跡だけです。仮に赤い佐渡の石だとすると、佐渡の石を使った管玉、ネックレスにする管玉が弥生時代に入ってきますが、当然、新潟から入って来るわけですね、北からずうっと流れて入って来る。けれども勾玉はおそらく入ってこない。するとどういいう由来で、千曲川流域にも入らないような赤い勾玉がここ、高森町へ来たのかというのが、一つ不思議なところなんです。なぜここに赤い玉があるのか。いろいろ考えられますけれど。ただ事実として赤い勾玉がここに1個ある。善光寺平とか千曲川流域にもあり、ここにあるなら分かるのですが、そっちにはないわけですから。いきなりここですものね。その辺が難しいところです。ここが弥生文化を考える四つ目のポイントですね。弥生時代、今から2000年ぐらい前になりますと非常に社会が発達してきます。弥生文化といとなかなかピンとこないのですけどね。昨日、たまたま歴史館で別の話をしましたが、県立歴史館で話をしても縄文文化はみんなよく分かる。信

州の縄文時代はよく分かるのです。しかし信州の弥生時代というとみんな、ピンとこない。信州の弥生時代はどんなだろうな、どんなものがあるだろうなって、ピンとこないんですね。だからもうちょっと弥生文化について少し広めなきゃいけないなって思うのです。縄文文化と違って弥生文化で特に注意しなければいけないのは、社会がすごく発達しているということ。それで、ものが大きく動くのです。たとえば佐渡産の赤い玉が動くというのは、縄文文化で考えると、新潟市あるいは上越から北の野尻湖を経て、たとえば飯山の辺まで来ましたと。飯山の辺から長野盆地あるいは長野辺りへ来ました。長野から松本辺りに来て、さらに上伊那を通過して飯田の方まで来たというようなルートをみんな考えるわけですね。縄文時代、ものが動いたと言うと比較的そういうふうを考えやすいです。

ただ、弥生時代はそんなふうに少しずつものが動くと言うシステムを超越する時代です。極端に言うと、これは言いすぎると嘘になりますが、新潟で玉を作った人が、北原遺跡だけのために玉を作ってここへ渡すということが起こり得た時代だということです。長野盆地を経由しなくてもいいのです。作っている人が北原遺跡に住んでいる弥生人あるいは弥生の村に玉を送り出すということをやっている社会が弥生社会です。なので、みなさんご存知の、中野市で柳沢銅戈というのが発見されましたよね。銅戈、銅鐸が北信の中野市で発見されました。今までないと言われていた青銅製の銅鐸が。弥生文化のお祭りの道具ですけれども、それが中野市の柳沢というところで発見された。通常だと大阪より東には出土しないところですから、ここにボンと。信州の山の方の、山奥と言っただけではいけないですけれども中野市で発見された。特に銅戈、戈とされる青銅で作った武器が8個出て来て、7個が大阪湾周辺で作られたと思われるわけですね。1個は実は九州で作られたとされる九州型というのが出たんです。九州型というのは本州の中で三つくらいしかないわけですね。大阪より東には、大阪にもないわけですから、兵庫県と島根県にしかないわけですから、それから東にはないのです。九州で作られたのが徐々に伝わってくるとなると、当然、丹後半島とか石川県、富山県、新潟県の方にあってもよいわけですね。だけど全くなくていきなり中野市にある。それは作られたものが動く時に、少しずつ伝わるのではなくて直接目的地にものを動かすということが起こり得たので、柳沢の遺跡に九州型の銅戈が入って来るといって、そういうことなのですね。そういう社会だということです。

全国屈指の出土量、信州の磨製石鏃と磨製石庖丁

最初にご案内しました北原遺跡の磨製石鏃です。いっぱい「時の駅」に展示してあります。石から破片を取って形を整えて、磨いて最後に穴を開けてできあがる。こうした作り方をします。1つ穴が開いている有孔磨製石鏃(ゆうこうませいせきぞく)ですね。もともとは磨製石鏃というのは米づくりと一緒に朝鮮半島から渡って来たものです。それを大量に北原遺跡では作っている。北原遺跡には何百点とあります。信州弥生文化の特質としての磨製石鏃ですからね。渡来した磨製の鏃だから、武器じゃないかとする人も多いです。普通の黒曜石の鏃じゃないから、武器じゃないか、闘う道具じゃないかとする人もいます。あるいはお祭りの道具じゃないかと言う人もいますね。いろいろな意見があります。

磨いた鏃というのは米づくりと一緒に来るわけですので、日本列島のどこにでもあるのかなと思われるかも知れません。磨製の石庖丁も同じですね。米づくりと一緒に中国大陸とか朝鮮半島から渡ってきたわけだから、日本列島に米づくりが伝わる中で、磨製の石庖丁も各地域に伝わっていると普通に思われがちですけれども、これもまた盲点で、実はそうではないのです。日本列島の弥生文化を考える時に、磨製の石庖丁、磨製の石鏃もそうですけれども、持っているところは少ないです。たくさん出てくるところは少ないのが事実です。

たとえばこの磨製の鏃ですね。信州ではおそらく北原遺跡が一番多いのかも知れないですね。長野県の磨製石鏃の出土数量は日本列島の中で、おそらく5本の指に入ります。そこを代表するのが北原遺跡ですから、5本の指に入るので、ここの北原遺跡が。

信州は磨製石庖丁も多いのです。たまたま北原遺跡の段階には南信に磨製石庖丁は入らないのですけれども、北に栗林文化がありまして、栗林文化に入って来る二つ穴の石庖丁の数を見ると、信州はですね、おそらく全国でも5本までとは言わないです、4本かも知れない、おそらく4、5本の指には入ってきます。一番多いのはどこかというところ、大阪府や福岡県、次いで兵庫県ですかね。その次に長野県が来るか、来ないかというところになります。石庖丁ですよ。子どもたちが教科書で習う、米づくりと一緒に渡来したと言われる、稲穂を摘む道具です。その磨製石庖丁が日本列島どこにでもあると思ったら大間違いで、あるところは少なくて、その中でも突出しているのは、福岡、大阪、兵庫、長野です。もう1個ぐらいあったかも知れないですが、そこに長野県は数えられるのです。大陸系の石器が多い県の中に数えられているのです。

私の出身の群馬県、米どころの新潟県に出土数は少ない。群馬県内の発掘調査資料すべてを集めても、磨製石庖丁というのはおそらく20点ぐらいしかありません。新潟県もおそらく15～16点ぐらいしかないですね。磨製の石庖丁ですよ、子どもたちが教科書で習う、それが新潟や群馬にはほとんどない。東京に至ってはですね、10本も出土していないですよ、発掘調査では。つまり東京都の子どもたちが歴史を学ぶ時に、磨製石庖丁の本物に触って見たくても触れない。でも信州の子どもたちは、触れる機会がある。なにせ信州全域で一つ穴の石庖丁を合わせ、採集品も含めると大体500点近くが確認されています。磨製石包丁の数が。

長野県の栗林文化、長野インターチェンジのところにある松原遺跡では、たった1つの遺跡で80本以上もあります。磨製の石庖丁が80本もあるのです。群馬県は全県足してもそれに満たない。長野盆地にある一つの遺跡で80点もある。なんで信州に。信州は米どころではあるかも知れないけれども、新潟平野や名古屋平野に比べれば、米の収穫量はいたって少ないですね。ここになぜ、大陸系の石の道具が入って来るかというのが、信州の米づくり文化を考えるうえで、四つ目の重要なポイントになります。

磨製石鏃の集中的な製作

北原遺跡は、磨製石鏃が県内で1番か2番、おそらく1番出ている。それなので1960年代以降ですね、北原遺跡といえば、大陸系の鏃を作ったということで有名になったようです。使い方についてはいろいろな考え方があります。武器であるとか、お祭りの道具であるとかね。この磨製の鏃というのは、武器とかそういうものではなくて、狩りをする道具だと私は思います。動物や魚類を捕る道具だと思います。この図は、地元の、ここ出身の松島(神村)透先生が『伊那』という雑誌に最初にお書きになった磨製の鏃、北原遺跡のものです。石を拾ってきて、打ち割って、磨いて、穴を開けて作りましたという図ですね。先生が高校生の時に書かれたものです。これ以来、北原遺跡というのは学界で有名になったのです。

次は長野盆地の例です。全体としては大まかに分けて北原遺跡と同じ工程です。磨製の鏃は県内どこでも同じ作り方になります。下に黒い点で示した図があります。実は栗林式土器の分布域とほぼ同じ範囲にあたります。その点は何かというところ、石を打ち欠いた打製の鏃です。皆さんがよく知っている黒曜石で作った鏃のことですね。黒曜石で作った鏃の範囲というのは、上伊那までしかないのです、弥生時

代は。北原遺跡にはない。飯田は遺跡が複合しているので、遺跡から打製の石鏃が出てくると言われますけれど、私はおそらく打製石鏃は作っていないと思います。北原遺跡にも今のところ、一つもないです。北の方には、栗林文化には打製の鏃があります。青く書いた線というのは磨製の鏃の分布範囲です。磨いた鏃です。磨いた鏃は南も北も両方に存在している。

黒曜石の意外な動き

ここで意外なのは、栗林文化は黒曜石で作った鏃も持っているけれども、磨いた鏃も持っていること。磨製石鏃が武器じゃないなというのは、何となく分かります。北の方だと打製と磨製と二つ持っているので、打製の鏃で鹿を取り、磨製の鏃で戦ったというふうに、理屈はとても良いですけれども、おそらくそうではないですね。北原の人たちは磨いた鏃しか持っていないということを考えると、北原の人たちが戦(いくさ)ばかりしていたとは思えないですよ。では南の人は、逆に打製の黒曜石の鏃を持たなかったら狩りができない、鹿はどうやって捕ったのか、罠で捕ったとする話もあるかも知れないけれど、縄文時代にずっと狩りをしていたのに、いきなり弥生時代になったら、弓矢を使わなくて罠になったということは多分ありえないので、おそらく。これは私の考えですが、北原文化を作った人たちが、大陸文化の直接的な影響ではないにしても、何となく影響を受けて、磨製の鏃を作り始めたのです。その鏃は、武器として作ったのではなくて、狩りの道具として作ったと思います。狩りの道具として作った磨製の鏃が、北原文化から逆に栗林文化の方に影響を及ぼして、栗林の人たちが磨製石器を作り始めたということなのかなと思つています。今後の追跡調査になりますけどね。北原遺跡より古い磨製石鏃が、北に出てこない方が、この説には都合が良いなということになります。

北の磨製石鏃が盛行するのもほぼ同じ時期なので、何とも言えませんが。北原遺跡の影響を受けて、栗林文化も磨製石器を持つようになったと考えた方が自然かなと。つまり、北の栗林の人たちは、ずっと打製の鏃を使っていたけれども、それプラス北原文化の人たちが使っていた磨製の鏃を作るようになった。それには何が関わって来るかと言うと、おそらく、赤く書いてありますけれども、赤く書いたのは黒曜石の原産地です。黒曜石の動きを矢印で書いています。これはね、面白いのですけれど、松原遺跡というのが長野市にあります。先ほど言った、磨製石庖丁が80本以上も出た遺跡です。長野インターチェンジのそばですね。そこに大きな赤い丸がありますが、信州産の黒曜石は北の方へずっと動いている、栗林文化の中で鏃として、鏃の材料として動いているのですけれども、長野市より北に黒曜石は動かないのです。同じ栗林文化で打製の鏃を作っているのだけれども、なぜか黒曜石は長野までしか来ないのです。そこから北へは行かない。その理由を解明した人は誰もいませんから、今後の課題です。若い諸君にやってもらわなくてははいけない。長野盆地までしか黒曜石は来ない、そこから北へは行かない。縄文時代は平気で行きますよ。中野市にも行ったり須坂市にも行ったり、飯山にも材料として動いて行きます。縄文時代には函館まで行くのですからね、信州産黒曜石は。そういう黒曜石が弥生時代の中頃になると、同じ栗林の土器文化でありながら、なぜか長野までしか来ない。中野も飯山も同じ栗林の土器文化圏です。同じ土器を使って村を作っている、けれど黒曜石は長野より北には行かない不思議な現象が起きている。くどいようですが、ここでも同じように、同じ土器を使っているからと言っても、同じ素材が共通に動くわけではないという一つの例です。うまく説明できないけれども。

黒曜石のルートも諏訪を越えて南信地域に入って来ます。入って来るのだけれども上伊那まで、箕輪までですね、箕輪周辺までしか入ってこない。

はい、これは北原遺跡の調査事例で土器を埋めた？土器を埋めて石でこう囲ってある。こういう炉があるよ、という写真です。次にいきます。

3) 北原式の終焉

北原式から座光寺原式へ、弥生後期への転換

弥生時代後期に北原式はどうかというと、北原式から座光寺原式が成立します。北原式からの移行期は同じような模様がみられます。弥生時代の中頃から弥生時代の後期にかかる時期ですね。座光寺原という地籍、飯田の座光寺原になります。

この下の図はどこかの遺跡かということ、箕輪遺跡です。箕輪町にある箕輪遺跡の資料を使っています。こんな感じですね。後期の初めです。北原式が終わる時、どうかというと、北の方の栗林式分布圏に新しい後期前半の吉田式という土器ができてきます。長野吉田高校というのが長野市にあります。吉田高校のグラウンドから出てきたので吉田式と名前がついています。この赤い、栗林とほぼ同じ分布圏に吉田式が成立してくるわけですね。

南の北原式分布圏には座光寺原式が栄えるという話なのですが、箕輪の今、青い？、これが座光寺原式の成立する古い時期の資料ではないかなと私は考えています。飯田じゃなくて上伊那かなと。まあ、飯田でも北原式の新しい資料が出てくればですが、今のところ成立は上伊那の箕輪遺跡周辺じゃないかな。つまり栗林がうんと影響を与えて黒曜石まで動く、その範囲内の、ここで座光寺原式が成立してくると思っています。

北原遺跡に座光寺原式の時期はありますか（声：北原遺跡にはないです）。ないということは、北原遺跡では、座光寺原式が成立する段階に遺構がないということですね。別の場所に集落が移った可能性があるということになる。弥生時代の中期から後期というのは今から2000年前ぐらいからあとに起こります。弥生中期の中頃から終わり頃は、実は全国的に遺跡が減ります。なぜか大きな集落が全国的に解体してしまうのです。北の栗林文化も同じです。中期から後期に移る時に、大きな集落はみんなどっかへ行ってしまう。どこへ行ったかは分かりませんが。寒冷化、寒くなったからという人もいるし、洪水が起こったとか、いろいろな意見があります。いずれにしても栗林という大きな文化が栄えた後の吉田式に移る時に、遺跡の数がうんと減ってします。同じように北原式も、おそらく北原文化の後ですね。北原の遺跡数自体が少ないから、逆に増えた形に見えますが、座光寺原式の成立期には北原遺跡などは別のところに移動したか、何らかの形で北原遺跡の時代は終わってしまったという形になるようです。

今日、たまたま展示室を見させていただいた時に、過渡期ですね、中期から後期に移る時に遺跡が新しく出来てくるところがある。北信地域では、それが長野市の吉田高校のところですね。南信地域では井上遺跡と箕輪町ですね、名前を忘れたけれど箕輪町にある遺跡ですね。何が言いたいかというと、中期から後期に移る時に、大きな遺跡がなくなっちゃって、どっかに行ってしまうと。そういう時期に新しく出てきた遺跡が、実は非常に計画的に作られたムラである。今日は出てきませんが、弥生中期のムラのようなすというものは、住居(家族単位か)が五つ六つまとまって、一つのグループをつくる。そのような集落を作るのが普通です。ところが、不思議なのです。弥生中期から後期に移ると、最初の集落というのは、住居がみんな列状に並んでいる。北信も南信もおそらく例外なく並んでいる。寒冷化で移動したのか、どうだか分かりませんが、いずれにしても後期という段階は新しく時代が変わる

時に計画的にムラが作られているらしいということが分かって来た。原因が何か分からないですが、計画的に作っているらしい。

中期から後期というのは、一般的に言うと、今までずっと使い続けてきた石器から鉄の道具に替わる時期です。石から鉄へ替わるのが中期から後期、そういう時期ですね。鉄が入ってきて、石を捨てて鉄に替わる時期に、大きな計画的なムラがぼつぼつと、今まで集落が営まれていない場所にできてくる、そういう現象が起きてきます。

座光寺原土器、中島式土器

この写真が座光寺原式土器です。古いものと新しいものとに分けられるろうと考えています。座光寺原式の後に中島式が出てきます。これまで座光寺原式の甕と中島式の甕は大きく違うと言われていました。口の形とか違いますよと言われていたのですが、今日、拝見させていただいた北原遺跡の中に、中島式の形と同じ形の甕があるんです。遠くから見れば中島式だと思われるようなものが北原遺跡の中にある。中島式ではなく明らかに北原式だと言えるのはなぜかという、そこに栗林式土器によく用いられる刷毛で調整し、櫛で描いたような羽状文がつけられています。中島式ではおそらく100%、こうした模様はつきませんから、羽状文は間違いなく栗林式の影響を受けた地域の土器だと考えられる。形を見ると弥生時代後期の土器です。そういうものが北原式にあることが分かりました。北原式というのはもしかしたら、我々には分からないけれども、非常に細かな段階的な変化があって、土器が移り変わっているかもしれません。北の栗林式土器と同じように細分できる可能性を持っていると今日、私は思いました。

4) - 1 まとめ(1)

本日のまとめの話になります。伊那谷の文化の特徴というのは、緩やかな流れだということ。伊那谷の弥生文化は緩やかに流れた。いろんなものが緩やかにゆっくり流れて弥生文化が熟成されたのが伊那谷の特徴だと思います。北の善光寺平とはまったく違います。ずっとゆっくりと時が流れている。

その特徴の一つが先に述べた石器です。弥生時代の中期から後期に移る時に、北信地域、特に善光寺平を中心とする千曲川流域では、まず後期段階に石器は全部なくなります。すべて鉄に置き換わる。石から鉄に劇的に変わります。この現象は長野県だけじゃない。長野県の場合は南信地域、特に伊那谷があるから、ちょっと特殊なんです、全国的には石から鉄へ大きく替わる。この現象を今風に言うと、最近経験したところで、ブラウン管のテレビからデジタルテレビに替わったじゃないですか。あれは、いつまでがアナログ放送ですよと政府が決めたわけですね。アナログ放送が終わってからは、移行期がありましたけれど、基本的にはみんなデジタルテレビに替わった。ブラウン管のテレビからデジタルテレビに替わるぐらいの大きな変化が、石から鉄への転換なんです。弥生時代に政府があったわけではないですけどね。政府のような政治的しくみが、弥生時代に全国的に完成されていたとは考えられませんが、そのくらい強い力が加わらないと変わらない。むしろ物流の経済的仕組みが、政治システムを担っていたのかも知れない。それを明解に説明できた人はいないですがね。弥生時代の中期から後期というのは、そのくらい大きな変化があるわけですね。そうした大きな変化で、日本中が動乱を迎えた中、伊那谷は後期になっても中期の北原遺跡が作り出した石器の種類をずっと使い続けている。石器づくりを放棄することはしないで、ずっと使い続けて古墳が現れるまで使います。伊那谷以外ではあまり考えられない現象ですね。だからといって鉄器がないわけではないです。鉄が入って来るかも知れないけれど

石をずっと使い続ける。ゆっくりと社会が、経済が動いているのです。

一つ穴と二つ穴、2種の磨製石庖丁

あっ、やっと出てきました。これが石庖丁です。これを先にお見せすればよかったですね。この図が二つ穴の石庖丁の分布ですね。北の方にあるのが二つ穴の石庖丁、栗林文化のもので、下の方にあるのが一つ穴の石庖丁です。ただし時期がちょっと違うんですね。一つ穴の石庖丁がいつから出てきたのが課題で、今回の企画展では、飯田市の遺跡で一つ穴の石庖丁が弥生中期から出ているので、その時期に展示しました。しかし北原遺跡には中期段階の一つ穴の石庖丁は1個もありません。私は北原式の段階には一つ穴の石庖丁はないと思っています。

先ほど申し上げたように、石から鉄に替わる中期終末から後期に移る段階、その段階に一つ穴の石庖丁は多分、作られ始めると思います。その一つ穴の石庖丁というのは諏訪盆地を中心にたくさんあります。そして、なぜか少量が千曲川流域に入り込んでいます。千曲川流域の弥生後期は、吉田式や箱清水式とされる別の文化に替わります。その中であって、なぜか上田盆地だけは一つ穴の石庖丁が入ってきます。千曲川流域は、吉田式なり箱清水式という土器の文化、「赤い土器」に統一されているにも関わらず、「赤い土器」の文化になって、石なんかもう使わないのに上田盆地だけはこの石器が入る。入り口は諏訪方面になります。なぜか分からないですが、諏訪から入ってくるのです。上田盆地も「赤い土器のクニ」の領域で鉄器を使っている。けれども、千曲川の間部部だけは諏訪をはじめとする南信の石庖丁の影響をたぶんに受けて使い始める。なぜか分からないが、そういう現象が北の一部で起きている。

冒頭で話しましたように、長野県には北と南、石庖丁ひとつとっても大きな違いがあり、それで弥生文化が構成されている。ある意味、日本列島の縮図と言いますかね、日本列島全体の中の石庖丁を考える時に長野県は一県で二つのことを考えることができる。これが群馬県に行くと一つ穴石庖丁がほとんどないわけですから、二つ穴しかない、しかも石庖丁自体が少ないわけですから、全然、論究できないわけですね。

一つ穴の石庖丁がどこから来たか、という話もあると思います。大陸からやって来たと。米づくりと共にやって来たとする、二つ穴でいいじゃないか、なぜ一つ穴なんだという話になる。今日の北原文化の話とはちょっと違ってしまいかも知れないですけども。一つ穴の石庖丁は日本列島の中に、どこにでもあるわけじゃない。これも限られちゃうんです、だから一つ穴の石庖丁のルーツを考えると、どこから、これが伊那谷にやって来たかというのを考えることに繋がる、伊那谷の弥生文化の元はどこなのかということも、関わってくるということなんです。

中国大陸では、この一つ穴の石庖丁は北の方にあるんですね。華北という北の寒い方に。田んぼが作れないところにあります。主に高粱(コウリャン)のような植物を摘む道具として使われています。それで二つ穴の石庖丁はどこにあるかという、揚子江流域の水田を作っている文化が、この二つ穴を使っています。中国大陸で比べてしまうと、北の方の粟とか雑穀を作っているのが一つ穴で、二つ穴は水田稲作の石庖丁ということになる。同じ石庖丁と言っても、刈る物が違うんじゃないかという話になってくる。ただですね、日本列島に北から入って来たかと言うと、そうとも言えないですね。もし朝鮮半島の北部からやって来て日本列島へ伝わったとすれば、当然、朝鮮半島に近い九州になればおかしいですね。福岡県や佐賀県に、この一つ穴の石庖丁が到着しなきゃいけない。しかしないですからね。

そうすると本当に朝鮮半島の北から下りてきたのか、高粱みたいなものを刈り取る道具としてやって

来たのかというと、ちょっとそうでもなさそう。ではどこにあるかということですね。私が思うのは、私の個人的な意見ですが、一つ穴の石庖丁というのは、おそらく南の方から来たんだらうと思っています。もともと飯田におられた国分直一先生が研究された、一番近いところが台湾です。台湾には、こうした一つ穴の石庖丁や打製石庖丁があります。台湾島とか南方方面から、やってきたものではないか、決して華北からやって来たものではないと私は思います。日本列島にある一つ穴の石庖丁はどこにあるのか、1つや2つ出るという話じゃないですよ。複数が出土するかどうかということですね。

これは実は九州でも南の方ですね。宮崎県と熊本県、鹿児島もちょっとあります。その辺に一つ穴が分布しています。九州北部にはないようです。九州の南部の他にどこにあるかということ、四国の高知にあります。瀬戸内もちょっとありますけれども高知に比べれば少ない。じゃ、九州の南にあって高知にあって、次はどこかっていけばここです、伊那谷です。

そうするとその三つを押さえてだけでも南の九州、四国の南、どーんときて天竜川流域になります。どうしたって北のルートは考えられないですね、南のルートで来たんだらう、そして台湾島にあるから、台湾からやって来たんだらう、そういう話にもなっちゃいますね。それは、まあじっくり研究してね、論証していかなくてはいけないですけども。少なくとも現象だけ、どこにあるかなと捉えておくだけでも、この一つ穴の石庖丁は、二つ穴の石庖丁とは違うところから来た可能性があるぞということが分かるわけです。

弥生文化期における新たな生産経済、新説の構築に向けて

なぜ、それがここに入って来て定着したかということが問題です。しかも定着したのが伊那谷だけじゃなくて、石を捨てて鉄を中心に使う北まで影響を及ぼしている、上田盆地にまで。上田盆地の人たちは鉄を使って次の文化に入っているはずなのに、そのムラに一つ穴の石庖丁が入って来る。それは必要があったから入り込むのですね。その必要性は何かということです。それはいろいろな想像ができますけれども、稲作文化の形態が稲を中心に作る農業形態と、例えば粟とか稗ですね、麦とか、そういうものを中心に作る農業形態という、二つが揃って存立している。いや存立していなければならないことがあるのかもしれない。文化圏を構成する地域間交渉の中で、生業の特定化、限定化をさける防御態勢がつけられていたとか、まあそれは想像ですけどね。

例えば稗や粟というのは冷害に強いわけですから、冷害が来ても稗や粟を作っていればある程度、食べて行けるわけですね。ただ、田んぼが全滅すれば食べられないですね。田んぼだけでは駄目だから、田んぼの他にこういうものも作らなくちゃいけない、副次的にですね。飢饉が来た時に米が取れなければ米に替わるものを作らなきゃいけない。それが一つの集落の中だけでなしに、地域間で起こりうる。多分、同一文化圏の地域間で支え合っていると思うのです。

思うに、例えば善光寺平を中心とする北の文化もそうなんですが。米づくりの他に畑作もいっぱいやって、麦や粟もたくさん作って、ひとつのムラを作って生きていた。という現代的な感覚ではなくて、弥生文化は、もしかしたら地域ごとに作るものにかたち(生産の型)があったんじゃないかという気がするんです。善光寺平、長野盆地は極端な話、米だけ作っている、米だけって当然ありえないから、米が主で麦や稗を客体的に作っていた。長野盆地の隣にある上田盆地では麦や粟を主体的に作っている。つまり粟や稗を中心に作る地域と、米を中心に作る地域が、一緒になって一つの共同体というか大きな農業(生産)共同体を形作るわけですよ、一つの文化というものを作っている、という気がするんですね、だから仮に北で米が中心に作られていたとすると、それは粟林文化ですよ。北の方で米をたくさん作っ

て米をたくさん出す、南の方では米に替わるものとして雑穀類をたくさん作る。それが補いあって一つの地域、生産経済圏、「クニ」を作るということが起こっていたのではないかなど、想像ですけどね。いわば信州型の弥生文化が形成されていたんじゃないかと。

それは、長野県が北と南で二つの旧国が、たまたま一個になったもので語ることができる。これを九州に置き換えると、同じようなことが、また分かる。九州は真ん中の方に阿蘇山がありますね。阿蘇があって、北の方には福岡県や佐賀県が、玄界灘側にありますね。有明海があって、南の方に鹿児島がある。九州全体を考えた時に、さっき言った二つ穴の石庖丁と同じものは北の方にあるわけです。一つ穴は阿蘇より南にあるんですね。九州島という島を考えた時に、長野県を大きくしたような状態が九州に起こっているわけです。北の方には二つ穴を持って、水田稲作をしているというところがいっぱいある。ところが南の方に行くと、一つ穴の石庖丁を持って、もしかしたら畑作もやっている。それで畑作をやっているような熊本や宮崎の周辺に、磨製の石鍬が大量にあります。出土数が5本の指に入る長野県と話しましたがけれど、5本の指に入るその一番はどこかと言うと、熊本や宮崎、大分などの阿蘇周辺です。阿蘇周辺部には磨製石鍬がたくさんあります。一つ穴の石庖丁を持ち、もしかしたら畑作かも知れませんが何かやっている。そこと伊那谷はよく似ているのですね、道具形態が。北の方も栗林文化は二つ穴の石庖丁を持ち、田んぼが発見されています。福岡平野の状況とよく似ています。

4)-2 まとめ(2)

それでは、改めてまとめにもどります。今、話をしたように、石、石器というものを中心に弥生文化を見た時に、四つぐらいポイントの話をしました。

一番、言いたいのは、同じ模様の土器が分布しているから、土器が同じだからといって、使っている道具の形は必ずしも一緒じゃないんだということです。北原文化というのは、道具を見れば諏訪とか松本と同じような道具を使っている。諏訪や松本というのは、伊那谷の影響を受けて一つの農業形態が出来ている可能性が高い、ということですね。ただ、土器の文化は北と同じものを使っているので、栗林文化と言うことになる。栗林文化で、千曲川流域が仮に水田だとすると、同じ栗林の中でも、雑穀類を作っているのは松本や塩尻周辺の地域にある。両方の地域で一つの栗林の文化圏を作っているという理解です。それがさらに発展すると、北の栗林と南の北原という二つがあって、一つの国と言っているかどうか分かりませんが、一つのまとまりをもつ。ということですね。

道具の動き、稲作と共にやって来た石器を見ると、磨製の石庖丁なり磨製の石鍬というのは、長野県は突出して多い。多い中にも形の違いは北と南にあります。南を代表するのは北原式です。南の文化と北の文化は何が違うのか、どうして違うのか、入って来た場所が違うのかということを考えていくすべての元はここ高森町にあります。北原遺跡を研究することは、伊那谷の文化を研究する出発点になる。ぜひとも北原遺跡を、長野県の弥生時代とはどういう時代だったのかを考える出発点として研究していきたい。課題はたくさんありますよね。石器がずーっと、弥生時代中期から後期に移っても、まだ同じものを使い続けている、文化の流れが緩やかだという話をしましたね。北原式の土器も緩やかに変化しているんだと思います。もう少し細かく研究すると動きが分かるのかもしれないですが。今のところは、緩やかに動いているとだけ申し上げておきたいと思います。

私は今、長野盆地の川中島というところに住んでいます。田んぼの跡がいっぱい発見されていて、稲作文化の中心地であるかのように言われることもあります。そんなことはないのであって、くどいよう

ですけれど、稲作文化というのは二つの系統があるので、一つの系統だけで語ることはできないし、文化を理解する上では、むしろ危険だと思います。二つの系統を押さえてこそ、稲作文化が分かる。

そう考えた時に、北の文化は、栗林式文化の次の文化は、石器を捨てちゃったというところに象徴される。石器を作らなくなったとすると、道具はどうしたかという鉄に替わったんです。鉄というのは弥生時代に自前で作れない、鉄を作ることはできません。どこで作ったかという、やはり朝鮮半島や中国大陸で作っているわけですね。その鉄が日本に輸入されて、日本列島の中を伝わりながら、鉄の道具が浸透していくわけです。簡単に言えば、信州の北に住んでいる人はお金を出して鉄を買わなければ道具は手に入らないんですね、石器を捨てちゃったんだから。石器をすべて捨てちゃいましたから。本当にすべてですよ、まったく何もない。鋏もなければ、こういう木の実は潰すような道具もない、何にもなくなっちゃうんですね。全部捨てちゃって、鉄になっちゃう。

でも伊那谷の人たちは、石で作った道具をずっと使い続けます。仮に信州の北部に鉄を送り出したところ、鉄を輸出したところが、近くで言えば富山県かもしれないし石川県かもしれない、まあ出雲の国かも知れないですね、そうした日本海側のルートで、鉄が長野県の北の方に入って来て、そこでそれを使って人々が生活していたとする。どういうことが起こるかという、石川県に鉄を送り出す大きなムラなりクニがあって、そこが鉄の輸出をストップするとどういうことになるかということ？ おそらく千曲川流域にある大きな弥生ムラは、すべてが大きな打撃を受けてしまいます。道具がないんですから。鉄の道具が入ってこなければ生活していけない。鉄がなくては木製農具も作れないし、ものも切れない。稲は手でちぎらなければならない。その場合、極端なことをいうと、鉄が失われるということは、ややもするとムラが壊滅状態に導かれてしまうということです。

それに比べて伊那谷は、自分で石器を作っているわけです。いつでも自分で道具を作っているわけですから、鉄が入ろうが入るまいがあまり左右されない。ずっと農業を営み続けることができる。まして生産物が冷害等に強いものであれば、ずっと農業を続けることができる。足腰の強い農業文化をこの伊那谷は作っていったと思うんですね。

善光寺平を中心とする北信は、そうして非常に危い文化体系に進んでいった。何が危ういかというと、政治的に社会的に危いのです。だから、もし石川の方で「鉄を出さないよ」と言われれば困っちゃうから、石川の人に従わざるを得ない。「お願いだから鉄をください」と従わなければならない文化になっているわけですね。やがて大和朝廷が成立し、古墳時代というものに替わっていきますよね。大きな社会変化が起こる時に、全体的に右へ倣えをしなければいけなかったのは、多分、北の人たちですね。北の人たちはすべての文物の動きを、他(:外側)から入手しなければいけないわけですから、すべてのことを向こう(:外側)に合わせる形で右へ倣えをしていく必要がある。

ところが南の人たちは、すべてを右に倣えしなくてよいわけです。自分たちだけで生活していけるので。生活できている範囲の中で発展していけばよい。発展しないわけではないですよ。発展はしているんです、緩やかに発展しています。他人に影響されない安定した文化を作っている。この意味では、すばらしい生活力だと思います。地産地消、独立した「クニ」と考えてよい。

最後に、伊那谷で分からないのは墓です。栗林文化に匹敵する北原文化の墓というのが分からないのです。墓がないと、王様がいたとかいないとかの説明ができないのですが、墓が出てこない。ここで不思議なのは方形周溝墓(ほうけいしゅうこうぼ)という、特殊な堀を持ったお墓が、弥生時代後期にも出てきますけれども、お墓の数はやはり少ないですよ。またお墓には何も入っていないのです。お墓の

中に。そうすると、「階級」というものは、どういうふうに発達していったのかな、というのが今後の課題に残るんですね。この地域は、人口が維持されていたことは間違いないです。大きなムラがあって堅穴住居がいくつもあるので、人口が維持されたことは間違いない。大きな人口を維持だけの生業があって、農業があり、生活をしてきたことは間違いない。自給自足、独立していける。足腰が強く生活力がある。だけど、その中に身分差みたいなものがどのくらい発達していたかということは、ちょっと解明できていない、説明できないでいる。もし身分差のない平等な社会であれば、まさに弥生化のユートピアといえる。社会学という学問の中では、一説では「分業」と呼ばれるように仕事を分けてやる、そういう分業態勢が発達しないとなかなか階級というのは成立してこないと言われている。例えば、善光寺平で米は作るけれども鉄は作らない、鉄を手に入れたとなると、鉄を作るところと米を作るところが分けられているわけですから、分業されているわけですね。そういう社会になると、階級というのが比較的出やすい。

けれども自分たちで道具を作り、農業を営んでいけば、別に分けてやらなくても生活できるわけですからね。だからそういうところというのは、なかなか分業というものが発達しないので、階級制が進まないと言われたりします。果たして、どうなのか。

今日は、北原遺跡を題材に話をしてきました。今後はもうちょっと発掘調査が進み、社会を、稲作の文化を、伊那谷の弥生社会というものを考えていければよいかと思っています。本当に社会そのものの仕組みが分からない。くどいようですがそのキーポイントとなるのが、北原遺跡です。とにかく北原遺跡をしっかり、百年二百年かけて追跡していけば、いずれ分かる、というふうに思っています。では時間になりましたので（拍手）。

